『君主論』要約

平　一

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『昔の政治は恐かった?　政治学の古典です。』

学生時代に西洋史か政治史の講座で出したレポートが見つかったので、新訳版とも対照し、修正・加筆したうえで投稿します。

当時と今の、変わらず中二病的な論評もついていますが（笑）、いま勉強中の方などの参考になりましたら幸いです。

今となっては懐かしい、学生時代の思い出に……。

目次

I 『君主論』要約 ―― 1
II 『君主論』感想 ―― 14

Ⅰ　『君主論』要約

1　君主国の種類

国々は君主国と共和国に分かれ、
君主国はさらに、世襲君主国と新興君主国に分かれる。
新興君主国には、全く新しい君主国と、
既存の君主国に併合された地域がある。
新興君主国には、元君主国か元共和国か、
獲得方法はどうだったかなどによる区分もある。

2　世襲の君主国

支配は、たやすい。　前例を踏襲し、不時に時を稼げばよい。
連続は連続につながり、変革は変革を呼ぶ。

3　複合型君主国

（1）　一般に、併合した地域を治めるのは難しい。

征服に加害はつきものだから、恨みは避けられない。
歓迎したものも、必ず幻滅するから扱いづらくなるし、
かといってむげにもできない。
それにつけても住民の支持は必要だ。
また謀反(むほん)は、いっぺん防げばあと楽になる。

（2）言語風習が同じで、
（願わくば専制の）世襲君主国だったところは、まだよい。
君主の血筋を根絶し、あと同じに保てばよい。

（3）言語風習が違うと大変だ。
①　君主自ら出向いて治めるか、移民兵を置くとよい。
自分が住めば不穏な動きもすぐ分かるし、部下の行き過ぎも防げる。
移民兵なら安上がりだし、被害を受ける者は少なく、
いても追い出されて貧困に陥るし、
被害を免(まぬが)れた者もほっとするやら恐いやらで逆らわない。
②　強い外部勢力を排除し、弱い国々を従えねばならない。
弱小国は生かさず殺さず、つけあがらぬようにしつつ味方につけ、
強いライバルは徹底的に叩いて手下を取られないようにする。

そのためには、先を読むことが必要である。
先読みの結果必要とあれば、戦争も辞(じ)してはならない。

4　アレキサンダー没後のペルシアで、反乱が起きなかった理由
トルコのような専制君主国家は、まとまった集権国家なので、
征服に難(かた)いが維持に易(やす)い。
フランスのような封建制国家は、分かれた分権制国家なので、
征服に易いが維持に難い。
ペルシアは、前者だった。

5　市民の自治制をとっていた、被占領地の治めかた
君主の支配下にあった都市や地方なら、
友好的な寡頭政権を現地住民に作らせればよいが、
自由な暮らしをしてきた共和制都市なら、
滅ぼすか自ら治めるしかない。

6　武力と力量による新君主国

新君主は、力量か幸運による。
どちらかだけということはないが、
力量によったほうが、苦労はしてもあと安泰である。
新秩序をつくる際には、旧秩序の受益者が敵に回るし、
新秩序の支持者も、畏怖心と猜疑心をもつから、難しい。
やはり他力本願は駄目で、
自分の力量で人々を従えてゆかねばならない。

7　他人の武力、または幸運による新君主国

他人の力や幸運は、変化しやすく、あてにならない。
チェーザレ・ボルジア（ヴァレンティーノ公）は、
運悪く失敗したが、力量では素晴らしい人だった。

8　非道による君主

成り上がりには、幸運や力量による場合のほかに、
非道による場合と市民の支持による場合がある。
陰謀や虐殺という非道は力量と呼べないが、

それでもその後、安泰だった例はある。
その理由とは、必要な非道を決然と行った後は、
それを蒸し返さず、臣下の利益も図ったことである。
加害行為は一気に行い、恩恵は小出しに与えるべきだ。
しかしもちろん、油断は禁物である。

9　市民の支持による君主

貴族の支持によるときと、民衆の支持によるときがある。
貴族は高慢なので扱いづらいし、少数なので恐れるに足りないが、
民衆は穏当なので扱いやすいし、多数なので敵に回すと恐い。
どちらの支持で立ったにしても、
大事なことは、民衆を味方につけるということである。

10　国力

十分な軍隊を持てない君主は、城市の守りを固め、
民衆の支持だけをつかんでいればよい。
そのような民衆は、攻められても士気が高いし、

醒めた時には、あとへ引けなくなってしまっている。

１１　教会君主国

力量か幸運で手に入れてしまえば、
あとは信仰と伝統があるので安泰。
ただしローマ教皇は、武力によって今の世俗的繁栄を得た。
願わくば今後は徳性により、栄えていただきたい。

１２　武力の種類、なかでも傭兵軍

武力には、自国軍、傭兵軍、外国の援軍、混成群がある。
傭兵軍は、あてにならない。
しょせんは金目当てなので、いざとなったら逃げやすく、
勝てばさらなる欲のため、勝手に暴れるようになる。
やっぱり自国軍がよい。
イタリアは、傭兵に頼ったせいで没落した。

１３　外国支援軍、混成群、自国軍

外国からの援軍は、なおたちが悪い。
勝ったら、次は自分がやられる。
やはり、自国軍がよい。
混成群は、中ぐらいに悪い。

１４　軍隊に関する君主の任務
君主の唯一の任務は、軍備である。
軍備によって、国は建てられ、保たれる。
実地や思考の訓練も、大事である。

１５　君主が賞賛、または非難される原因
事実を離れて当為を論ずる君主は、破滅する。
身を守るため、地位に関わる汚名は避けるべきだが、
必要な時は、それも恐れてはならない。

１６　鷹揚（おうよう）さと吝嗇（りんしょく）
君主は、けちだと言われることを恐れてはならない。

鷹揚にしていてみ、自分のものを失って蔑(さげす)まれるか、
他人のものまで取り上げて恨みを買い、民衆の支持を失うだけだ。
けちだと言われても、国が豊かで強くなれば、
自(おの)ずと評判は高まる。
ただし、これから君主になろうとする者には、
鷹揚とみられることが必要である。
また、軍隊が他国で略奪できるときは、大いに鷹揚にすべきだ。

17　冷酷さと憐れみぶかさ、恐れられることと愛されること

君主は、憐れみぶかいと評されるほうが良いが、
新君主などは特に、必要とあれば冷酷にならねばならない。
冷酷さが国を守り、憐れみが国を滅ぼすこともある。
また君主にとっては、愛されるより恐れられるほうが安全だ。
人間なんて、自分勝手なものだからだ。
ただし、理由もなしに国民の財産などを奪ったりして、
恨みを買ってはならない。

１８　君主と信義

君主は、不信義も恐れてはならない。
君主は、人間の法と野獣の力を使い分けられねばならない。
人間自体が、そういうものだからだ。
ただ、信義深いと思われることは重要である。
しかし、大多数の者にそう思わせればよく、
あとはひたすら手段を選ばず、国を維持してゆくべきだ。

１９　軽蔑と憎悪を避ける法

多数人の名誉や財産を奪わない。　弱みを見せない。
民衆の支持があれば、内憂も外患も恐くないだろう。
フランスのように、民衆も貴族もひいきしないよう、
高等法院のような裁定役を他に作るのもよい。
昔のローマは強欲な軍隊があったため、
皇帝達は善良でも消され、残酷でもそれゆえに
非業の死を遂げるということがあった。
しかし今では、トルコ・エジプト以外はどこでも、

軍隊より民衆の力が大きいので、そういう難しさはない。

２０　城塞その他の有益性

一般的には、次のように言える。
新しく建てた国は、武装せねばならない。
併合した地域は、武装を解くべきである。
自分の国を分裂させて治めると、外敵にやられるのでよくない。
新君主は、進んで敵を作り、倒してでも、
勢力を拡大してゆくべきだ。
新体制に疑いを持つ者達は懐柔し、
旧体制を裏切った者達は信じるな。
城を作るのもよいが、民衆が外敵につけば役立たないので、
それより民衆を味方につけるべきだ。

２１　尊敬される法

（１）大事業（戦争）を行い、優れた手腕を示す。
（２）他者が争っているときは、敵味方をはっきりさせる。

当事国が強ければ、勝者の感謝を得て、敗者の恨みをはね返せる。
当事国が弱ければ、勝者を従わせ、敗者を滅ぼせる。
自分より強い相手とは組まない方がよいが、やむを得ぬ場合もある。
（3）君主の威厳を保ちつつ、功労者を顕彰し、市民を鼓舞し、
様々な集団に配慮し、会合を持って人間味と広い度量を示すとよい。

22　君主の側近たる秘書官

君主は、自分が理解できないことでも、
他人が理解しているかどうか、見分けられなければならない。
側近を見分け、自分でなく君主を思う人物を、
分をわきまえさせたうえで、とりたてねばならない。

23　追従（ついしょう）者を避ける法

追従者に騙（だま）されたり、
臣下から甘く見られたりするのを防ぐには、
選ばれた賢者だけに、こちらから尋ねた時にだけ、
自由に意見を言わせることである。

しかし、側近に頼るのではなく、君主自身が判断し、
決めたらそれを守り通すべきである。

２４　イタリア君主達の失地の理由
新君主が国を栄えさせるのは、二重の栄光。
世襲君主が国を失うのは、二重の不面目。
イタリアの君主達は民衆か貴族の支持を失い、
自国軍もなかったため、国を失った。
それは幸運に頼り、力量を持たなかったということだ。

２５　運命について
運命はどうにもならないが、
君主の成功不成功は、それだけにはかからない。
運命の変化に応じてやり方を変え、
運命を力量で切り開いていく君主は、成功しやすい。

２６　イタリアを外敵から解放するためのすすめ

イタリアは今ひどい状態にあり、
そこから救い出してくれる君主を必要としている。
その君主は、ロレンツォ・デ・メディチしかいない。
常備軍さえ整えれば、イタリアは統一できる。
頑張れ、メディチ！

Ⅱ　『君主論』感想

1　昔の感想

「君主論」は、
「君主には手段を選べぬ時もある」という内容で知られるが、
ルネッサンスの人間中心主義をあらわす著作としても必ず挙げられる。
人間性とは何だろうか？
人間の欲求は、他の動物より質的にも量的にも無制限的であり、
それこそが人間性の本質なのではないだろうか。
それは善なるものだけでなく、悪なるものも含んでおり、
人間の歴史は、善悪両面における発達史といってもよいかもしれない。
神と悪魔がどちらも、人間がもつ二側面の象徴だとすれば、
現代こそはまさに、人々の心の中で最大の、
もしかしたら最後の戦いを行う、
黙示録の時代といえるのかもしれない。
（現在の筆者注：今と変わらぬ中二病ですが［笑］、

当時は今より核戦争が心配な、冷戦時代末期でした）
このような時代にはなおのこと、マキャベリが行った、
彼自身のことも含めた人間性暴露の鋭さが実感される。
しかし「君主論」は、歴史上の事実を書いた歴史学書でもある。
歴史学とは何か。「君主論」はそこでどう位置づけられるのか。
第一に、歴史学は物語や宗教ではなく科学なので、
あくまでも事実を基礎とする。
マキャベリが神その他の、
事実以外のものを持ち出さなかったことは優れている。
第二に、歴史学は事実の一般化を行い、
法則性を導き出そうとする。
「君主論」はこの点でもまことに実用的な、
歴史の教訓の宝庫である。
第三に、歴史学は「どうすべきか」という意思決定ではなく、
「どうなっているか」という事実認識を行う学問である。
もちろん無数の事実から、ある価値観で重要な事実を選ばねば、
単なる古記録収集に終わってしまう。

しかし重心は、あくまでも事実にある。
価値が事実を歪(ゆが)めてはならない。
それでは歴史小説になってしまう。
価値に反する事実を無視してはならない。
それでは宣伝文書になってしまう。
人々が歴史学に求めるものは、他人の判断でなく、
自分で判断するための材料となる事実であろう。
価値が事実に勝(まさ)ったのでは信用されないし、
事実がしっかりしていれば、選んだ価値も信用されるだろう。
歴史学ではやはり、事実が勝負である。
もちろん、政治家と歴史家の兼業もありうる。
知識提供を食材販売、政治活動を調理とすれば、
名コックは良い食材を選ぶことも上手いかもしれない。
しかし、調理は自分でしたいという、
意見をもった人々の気持ちも尊重したい。
第三の基準からすると、「君主論」は政治的文書であり、
純粋な歴史学書ではない。

マキャベリは、活きのよい素材を、
目の前で調理して出して見せた。
また、手段を選ばぬ君主による統治という価値判断には、
ゲテモノ料理の観もある。
その材料となった人間性の数々には、
とても好ましいと言えないものも多い。
だがその料理には、現実的手段による国家統一という、
大事な栄養素も含まれていた。
また人間性が悪をも含んでいる以上、
その材料は他の料理にも不可欠な素材かもしれない。
そしてマキャベリの料理が、
後に実際のイタリア統一という形で食されたとすれば、
少なくとも即効性の猛毒ではなかったことになるし、
その食材は以後も各国で同様の料理に用いられている。
歴史学の成果は、未来への貢献により判断され、
まさに歴史によって裁かれるが、
それは一方で「食べてみなけりゃわからない」

ということでもある。
「君主論」をどう評価するにせよ、最終的な当否の判定は、
今後我々がいかなる社会を築いてゆけるかにかかっている。
歴史学の成果が必ずや人類の自己制御に役立ち、
その永き反映と幸福をもたらしてくれるよう願いたい。

2　今の感想

『君主論』は戦乱時代の本なので、恐い記述もありますが、
近代的かつ現実主義的な政治理論を初めて記した、名著とされています。
『権力と正当性（強制力と支持）は政治の両輪』といわれますが、
マキャベリはこれらを力量（ヴィルトゥ）という言葉で表現したのだと思います。
この力量（ヴィルトゥ）とは人々を動かす統治技術、あるいは統治技術の活用政策と、
人々から支持を得る統治政策の内容と言い換えることができましょう。
一方、彼が言う運命（フォルトゥナ）とは、統治の成否に影響する、
技術や政策でも制御しきれない自然・社会環境を指していると思います。
またこの本は、イタリアの国家統一を、
その政治理論により解決すべき主題としてあげています。

確かにイタリアのような半島国家は、独自文化を持ちうる反面、
常に大陸からの圧力にさらされ、時には対岸との板挟みにもあって、
政治的な連続的変化(グラデーション)がついてしまうため、
国家統一が比較的に難しかったと思われます。
もっともその分、半島には大きな国家に頼らぬ独立の気風もあり、
この本にもあるように、個人が優秀な才能を発揮したり、
地域に活力があったりするという長所がみられます。
ヨーロッパ自体が巨大な半島とみることができ、
その地域間競争の活力が近代文明の発展を可能にしたという、
有力な説もあるようです。
当時から現在までに、科学・技術が発達し、
経済・社会活動ひいては制度・政策は変化してきました。
特に工業時代においては、イタリアを含む多くの大国で、
国民国家の設立や民主化が達成されました。
農耕〜工業時代には灌漑や、この本でも多く書かれた軍事など、
富の安全を含む生産に関わる、技術的政策が主な政策でしたが、
工業〜情報時代にかけては、産業立国や福祉国家のように、

富の再投資を含む分配に関わる、経済・社会政策も発達しました。
とはいえ私達はまだ、様々な国家間の紛争や、
資源・環境問題、不況、貧困などの問題を抱えています。
加えて私達は、少子高齢化などによる経年・経代的な健康水準の低下や、
社会の複雑化による教育難度の上昇といった問題にも直面しています。
情報時代～ＡＩ時代には、産業の変化に応じた人材育成や、
介護・疾病予防、教育困難の解消のように、
富を作って分ける人間自身の向上に関わる、
人的資源政策も可能、かつ必要になっていくと思います。
実は昔から、文明が発達すると人間は衰えるという
『文明の逆説（パラドックス）』（立花隆）は存在し、
それは災害や疫病、そしてこの本にも書かれた戦争などの
淘汰によって〝解決〟されてきたのかもしれません。
しかし今では犠牲や費用（コスト）、危険（リスク）が大きすぎ、何よりも非人道的です。
人間の理想や欲望は、そうした〝無駄〟を許せなくなるでしょう。
富の生産と分配に加え、人間自身の維持・向上を可能にする、
新たな技術も生まれつつあります。

人工知能（ＡＩ）を中心とした知能ロボット、
ＩｏＴとビッグデータ処理、新素材・エネルギー、
生物工学（バイオテクノロジー）／生体工学（バイオニクス）、先進医療・教育などの、
次世代技術です。
それは人体など自然物と、機械など人工物の間の
障壁を取り除いて双方の持続可能性を高める、
体内環境を含む自然・社会環境に優しい技術であり、
持続可能技術、環境親和技術ともいうべき技術です。
技術が進めば、経済・社会活動は拡大・複雑・加速化するので、
制度・政策もまた、必要とあれば大勢が動くが衆知も活かせるよう、
国際化・全球統治（グローバルガバナンス）など巨大化と共に、
民主化・自由化・地方分権など分権化してゆきます。
それが今後も進んでゆけば、世界規模の平和と共生が可能となり、
活力ある半島も、まとまりのよい島国も、規模の利益がある大陸も、
各自の短所を補い合いつつ、長所を活かして建設的に競争し、
共に発展してゆけると思います。
ＡＩなどの次世代技術と、それを活用する人間的政策により、

マキャベリが正しく描いた人間性の、負の側面を抑えつつ、
正の側面を発揮させていくことで、
文明の持続可能性が実現できるよう期待します。
ああっ、すみません！　私も努力しますので……。
（→　もはや中高年となり、健康診断で要指導の中二病オタク［苦笑］）